

令和3年度第1回県立長野図書館協議会議事要録

1 日時

令和3年(2021年)7月16日(金) 午後1時30分～午後3時40分

2 場所

県立長野図書館 会議室

3 出席者

<委員(五十音順)>

渡邊 匡一 会長 内山 由香里 委員(ウェブで参加) 大林 晃美 委員
春日 由紀夫 委員 西山 卓郎 委員 平賀 研也 委員 松山 佳奈子 委員
棟田 聖子 委員

<県立長野図書館>

森 館長 中村 副館長兼総務企画課長 永野 資料情報課長兼資料係長
北原 課長補佐兼総務係長 河野 情報係長 篠田 企画係長 柳沢 専門幹 槌賀 主査
朝倉 主査 町田 主任 横山 主事 畔上 主事 金子 主事 内川 主事 永井 主事
佐藤 主事

<長野県教育委員会事務局 文化財・生涯学習課>

久保 課長、小澤 主査

4 会議次第

(1) 開 会

(2) 館長あいさつ

(3) 委員紹介

(4) 職員紹介

(5) 会議事項

ア 県立長野図書館の現況について

イ 「県立長野図書館のミッション・ビジョン」について

ウ 電子書籍サービス導入に向けて

エ 「信州ナレッジスクエア」の進捗について

オ その他

図書館大会について

(6) 閉 会

5 会議の概要

(1) 館長あいさつ(要旨)

本日はお忙しい中ご参集いただき、感謝申し上げます。前回の協議会が2月4日だったので5ヵ月ぶりとなる。

今回は、「県立長野図書館のミッション・ビジョン」を確定させ、教育委員会内でオーソライズし、公表していきたいと考えている。

「電子書籍サービスの全県的な導入」については、検討を進めることについて教育三役からの了承が得られ、新しい展開が始まっている。現時点での状況と今後の見通しについてご報告し、ご意見を伺いたいと思う。

最後に、フリートークの時間も設けている。さまざまなバックグラウンドを持つ委員の皆さまにご参画いただいているので、新しい視点で「これから」のことが語り合えるよう、お話を伺いたい。

(2) 県立長野図書館の現況について

資料により永野資料情報課長から説明

(3) 「県立長野図書館のミッション・ビジョン」について

資料により篠田企画係長から説明

(4) 電子書籍サービス導入に向けて

資料により企画係横山主事から説明。また、森館長及び中村副館長より補足説明。

(5) 「信州ナレッジスクエア」の進捗について

資料により資料係槌賀主査から説明

(6) 図書館大会について

資料により中村副館長から説明

(7) 委員との主な質疑応答

質 疑	応 答
現況において、ネット貸出件数が増えている。既存のユーザーがよりヘビーユーザーになったのか。あるいは新規ユーザーが増えたのか。(西山委員)	件数的には平成 28 年 29 年 30 年と変化がなく令和元年 2 年で伸びた。特に令和 2 年で増えた。ヘビーユーザーになったというよりは、コロナ禍で利用者が増えたと考えている。 (永野資料情報課長) <補足> 会議後、統計情報を確認した。コロナ前後で新規の登録者数は大幅には変わっていないという傾向が見られた。この結果をメールで委員に報告した。
借りられている本の種類とか、絵本が良く借りられるとか理由がわかるか。(西山委員)	絵本については、ひと家族でまとめて借りていくイメージであり、1人1人が個別に借りていくイメージではない。 コロナ禍で館内利用滞在時間を減らす対策が取られたため、予約が浸透したのではないかと思う。 図書館の無い地域、公民館図書室での受取が伸びている印象があるが、現在数値として把握していない。(柳沢専門幹) ご指摘の利用がどのように伸びたのかは重要なポイントである。現段階で詳細の分析は出来ていないが、これから詳細を見てご報告したい。(森館長)
ホームページのアクセス状況について 昨年は休館が続いたのでホームページを見る人が増えたのではないかと思ったが割と減っているように思う。その原因についてどう考えるか。(大林委員)	ホームページのリニューアルをしたことで、ページの構成が大きく変わった。 トップページとナレッジスクエアのページが最初にアクセスするところとして分散したのではないかと思う。 県立長野図書館を検索すると、最初にナレッジスクエアが出てきて、そこから入って他のページに流れていくというようなことだと推測している。 入口が増えたと考えている。(森館長) ホームページの構成の中で、トップページ、それからナレッジスクエアの他に信州ブックサーチが伸びている。信州ブックサーチをお気に入り登録して検索もそこからしている人もいると思われる。トップページとナレッジスクエア、信州ブックサーチ、すべてを県立長野図書館のホームページの入口と考えている。(朝倉主査)

<p>データベースの利用について コロナ禍により、信大附属図書館では電子ジャーナルは格段に増えたが、データベース利用が1年間で減った。その一番の理由として、データベースは図書館に来ないと使えないから、その分だけ増えなかったのではないかと考えられる。 同じようなことは県立長野図書館でも起きているか。(渡邊委員)</p>	<p>公共図書館はすべて館内利用なので、データベース利用は完全に止まってしまった。しかしそれは休館中のことで、開館になってもデータベースは感染リスクが比較的高い部類のサービスなので、パソコンの前に座る時間に制限を掛けていた。いろんな意味でマイナス要因はある ただ、コロナ禍であることだけが理由ではなく、データベース利用はまだまだ定着していないといえる状況もあったと思う。もっとプロモーションして使っていただくような努力は必要だと考える。(森館長)</p>
<p>組織の改正で総務企画課とし、企画係長、副館長をおいたことで、県立図書館としての取組は変わっていくのか。企画係長は全县に関する取組を行っていくととらえていいのか。(春日委員)</p>	<p>県立図書館ならではの仕事という面では、他機関との連携や市町村支援を重点項目として引き続き考え取り組んでいく。 副館長という職名が付いたことで、館長の補佐として対外的にも館長の代理者としてのイメージを持ってもらえればと思う。(中村副館長)</p> <p>副館長は企画係と同様に対外的な所をやっていくポストなので、館として強化したことになる。 (森館長)</p>
<p>ミッションがあって、令和3年の事業方針がある。その令和3年の事業方針に則って議論を進めた後に中期的な姿が具体的に見えるようになってもいいのではないかと思うが、3年から5スパンでどこをどういう形で目指すのか。 令和3年度取組方針4つのうちの1・2は特に直接サービスについて考えますと言っており、後半の3・4は県域に対する情報基盤を整えるということだが、 県民に対する県立図書館の在り方というのはこの2つの大きなテーマのもと、県立図書館は、そこに行ったら、県民視点でどういうサービスを受けられる場所なのか、たとえば児童室に行ったら長野市立と県立の児童図書室のサービスは一緒なのか、違うのかなどが令和3年度の中で見直しますという言葉の中で、また一段と十分な見直しをされるのだろうと思うが。 e Library 計画との関連もあるが、県立だからゆえに作り出す、集める資料とは何か、如何に集められるのかなどより具体的に県民に届ける言葉で、令和3年度に執行しながらまとめられたらいいのでは。 また、県民の基盤に関しては、人材の育成ということでの研究会とe Library 計画におけるデジタルな情報基盤が主になってくると思うが、その中で、市町村立図書館、市町村教育委員会とどういう関係を創っていくのかというイメージはどうか。</p>	<p>昨年度中にミッション・ビジョンを完成させ、今年度はそれに基づいた3年から5年位の方向性と、年次ごとの事業計画という構成にする予定だった。 先行して今年度の事業計画を立てたが、ご指摘いただいたことを踏まえて、長いスパンでの話と単年度の中間のスパンのものを作りたいと考えている。 前回の協議会で「評価の観点が必要」とご指摘いただいていた。これまで、『概要』は、貸出や来館等の統計や、実施したイベントの列挙をしていたが、それに加えて、「ミッション・ビジョンに照らし合わせた時にどのような意味、進捗があったのか」、「ここは足りていないのもうちょっと頑張りたい」とかいう要素を少し加味していきたい。 自己評価をしながら軌道修正が必要であったり、足りてなかったところには注力できるようにしたり、自分たちを縛るのではなく、よりやりやすく、県民の皆さんに対しては成果を「見える化」することを意識していきたいと考えている。 (森館長)</p>

<p>市町村と一律にくくっているが、77 の市町村に平板にアクセスすることは限られた中では難しい。長野県は 10 のブロックのつながりが強いので、それを活かした計画にするのか。3 年度 of 取組の中で、県立図書館はどういう形や方針なのかがより具体的になってきたところで 3 年 5 年の中期的ビジョンができたらいいいのではないかと思うがいかがが。 (平賀委員)</p>	
<p>資料 2-2 のミッションにおいて、「県立長野図書館は・・・」とある中で、あえて「信州に関わる全ての人々が・・・」とし、長野県と言わないところについて、行政の中で長野県と信州はどういう捉え方なのか。自分たちも長野県人と言うより、信州人と言う方が多いが、長野県を使わない意味がもっと前面に出るといいと思った。だが、信州という言葉を使い前面に出したミッションはいいと言う意味で質問した。 (棟田委員)</p>	<p>整合性という観点では、長野県と言った方が文章は整合していると思う。美術館も信濃美術館が長野県立美術館に変更された。そういう分かりやすさはある。 しかし、ここでは言葉の整合性よりも「意味」を重視した。県立長野図書館は固有名詞なので、もちろん使うが、文化・歴史的なことを表現する時にはあえて「信州」という言葉こそ使いたい。これは「信州ナレッジスクエア」や「信州・学び創造ラボ」のように、これまで県立長野図書館が行ってきた事業に、「信州」という言葉を使ってきたことと相通ずると思う。 前回の協議会でもミッション・ビジョンの対象をどこにするのか、かなりご議論いただいた。それも踏まえて、「信州」に「関わる」という表現を使いたいということ館内で話し合っ決めて。 (森館長)</p>
<p>電子書籍サービスの導入については、これからやり方を決めていくということだが、今、予算がどんどん減らされている時に、これを新たに実施するなら今の予算のこの部分を減額すると言われるのは目に見える。ただでさえ予算減額されているのに、さらに減額されるのはつらい。 現在の予算プラスアルファで導入できるよう、先事例をしっかりと見せていただくことや、どういう観点で教育委員会にアプローチしていくのかということなど、作戦を立てて進めていただければありがたい。そのあたりのお考えはいかがか。 (大林委員)</p>	<p>予算についての厳しさは承知している。県も同じで厳しい。ただでさえ減らされている紙の本を買うお金から何割と言われるのは非常にきついだろうと思う。しかし現実問題、既存の資料費を削る覚悟をせざるを得ないとも考えることもある。ただ、全ての市町村がそうであるとは限らない。「両方に力を入れていきたいから新規」でという自治体さんもいると期待している。予算要求をする際に、どんなことばが相手に響くのかは考えなければいけないと思っている。(森館長)</p>
<p>電子書籍サービスの導入については、参加した各自自治体にとってメリットがあるか、自分のためじゃなくて、その町にとって、町民皆のためにちょっとしたお金を使うことで、それ以上に大きなものを手に入れるインセンティブをどう盛り込めるかというのが一つ大きな肝だと思う。 県立図書館の事業で言えば、県民に対し 4500 万円レベルの資料費に戻すことは大事だよと言うのは基本としてあるはず。でも厳しい現状もある。その中でデジタルなリソースにシフトを補完するんだという</p>	<p>公共図書館向けの電子書籍サービスのコンテンツは質量ともに課題が大きい。 本事業では、ローカルな出版社に対してまず働きかけを行いたい。今は比較的規模の大きい中央の出版社等が電子書籍を出していると思われる。 電子出版をするだけのコストがかけられない、初期投資ができないといった理由で地域の出版社は難しい中、北海道では、電子書籍の協議会を組んで一緒にやっていくという話も聞いている。 郷土資料と言われている資料を多く出版しているところが電子書籍化に動き出してくれるとコンテンツが豊かになり、他県からも歓迎されると思う。</p>

<p>覚悟は県立としてお持ちなのだろうなど。令和3年度の資料見直しの中でも、そのことにむけて、どういう資料をどういう形で買っていくのかという緻密な議論は必要だと思う。その覚悟はあるのですね。 (平賀委員)</p>	<p>情報流通、出版流通の在り方そのものがひずんできているのではないか、流通するコンテンツを一緒に豊かにしていけるような関係性を築いていきたい。 完全に紙の本を電子に置き換えができるような状況ではない。内容や用途によって紙の本で買うべきものと電子は使い分けたい。これは電子のほうが使い勝手がいいね、これは紙の方がいいねという選択肢を広げていくことで、利用者の皆さんが読める資料が十分なものになっているという世界になっていくのが一番だと思う。(森館長)</p>
<p>信州ナレッジスクエアについては、ユーザー体験的な部分だが、もっとスマホで使い易くしていかないと、なかなか広がっていかないと思うが。(西山委員)</p>	<p>それは課題だと思っている。例えば「e Reading 信州学」をスマホで使ったら、キーワードにリンクして出てくるウィキペディアや新書マップが見えなかった。 改善していきたいので、具体的に気になったところがあれば教えていただきたい。(森館長)</p>

(8) 委員からの意見や要望

ア ミッション・ビジョンについて

- ・ すごくいいと思う。ここまでまとまったのを見ると、ここに至るまで多大なプロセスを踏んできたのだと思う。(西山委員)
- ・ 「関わる全ての人」という表現もいい。住んでいる人に限定したり、何か一定の興味や知りたい対象として地理的な範囲ではなくて、何かシンパシーを感じている人たちが行動しているニュアンスになる具体的なプロジェクトができるといいですね。(平賀委員)
- ・ 信州大学も、明治の終わりぐらいにはすでに「信州大学」にしようとする県内の人たちが決まっていた。国立大学では原則として県名を付けることになっていたが、長野県に大学を創ろうとなった時からその名前は「信州」がいいと当時の人たちが考えて付けた。なので、ここに住む人たちがここで共有する空間のイメージは、県ではなくて信州がふさわしいだろうと私も思う。(渡邊委員)
- ・ 行政には評価機軸があるが、要はアウトカム。科学的な数値やポテンシャルはもちろん大事だが、基本的なスタンスとしては、社会的な価値創造として我々はどう議論していくのか、その上でいろんなプロジェクトを試行錯誤しながら、中長期的に見直していくのがいいのかなと思う。(平賀委員)
- ・ 評価指標というのは、指標ありきではダメだと痛感している。なぜかというところ3～5年間で出来るのはどれかという指標の選び方になり、「これだったら評価されやすい。しやすいからそれにしよう。」となりがち。その結果、単なる指標ばかりがどんどん増えていくのはよくないという実感がある。(渡邊委員)
- ・ 素晴らしいミッション・ビジョンだと思う。価値的な存在としての図書館というものが明確になってきて、大事な仕事をこれからも続けていくのだという決意がわかる。素人から見るとやや分かりにくい言葉もあるが、それもこれからの中期的目標の中で具体化していくということで納得した。行動指針では、東伊那の公民館にいる立場として、コラボレーションに期待している。是非積極的に図書館を飛び出して、場を与えるだけでなく共に環境を作っていくんだという姿勢を(例えば公民館などへ)示していただくと、公民館の職員に興味のある者はいるので、広がっていく可能性があるかと非常に期待している。私のいる地域は自慢できる自然はあるが、本当に小さな場所。だからこそ住民はいろんな意味で開かれて行かなければならないし、地域の中で仲良くということだけではなく、これからの社会の価値的なものを自分たちで作っていくこと、広げていくことが大切だとこの3ヵ月で感じた。一緒にできればおもしろい。(春日委員)

- まだまだ実際の住民、市民、県民の言葉にはなりきれていない部分はある。「e Library 計画」にも地域資料とあるが、地域資料は図書館の視点の言葉。でも、「e Library 計画」の中の「創る」が、「自分たちで記録を創る」「地域の記録を作っていこう」という言葉になればそれは市民、生活者の言葉だと思う。前に押し出していく言葉は、もっともっと生活者のところに響く言葉に。さらに中期計画という意味では、生活者もちろん、市町村の図書館や行政の人たちにも響く言葉でブラッシュアップしていくことが大事かなと思う。(平賀委員)

イ 電子書籍サービスについて

- 公民館の視点で見れば、説明いただいたことが全て揃っている。子供が来る。大人も来る。子育て世代のお母さん方の講座が月に4回くらいある。お年寄りはもちろん来る。そして、お年寄りは今スマホを全員持っている。駒ヶ根市の場合は危機管理上、第3次補正で公民館にWi-Fiが入った。フリーWi-Fiで誰でも使える。そういうところをうまく使っていただければ、そこから広がっていく可能性もある。子育て世代が自分の本を読む時間がないというのはほんとにそう思う。でも、公民館へ来たときに、話を聞いてやり方を教えてもらえば参加したいということはあるはず。公民館は全部そろっているのだから、是非テストケースでやっていただきたい。(春日委員)
- 公民館の状況はそのとおりだが、ゲームに使われたら困るとか、Wi-Fiの市民開放に躊躇する風潮はある。実際に一人一人はスマホ持っているけど、公民館や図書館でタブレットを使って読むということは、少し敷居が高い部分もまだある。市町村の図書館に、新しい読書環境を整えるサポート(タブレットを貸してあげるとか)などが必要かなと思う。(平賀委員)
- 進めていくにあたっては、市町村の受け手の側をどうするかなど県立図書館と市町村の教育委員会との関係性を作ることが重要。どうつなげていくかが大事だと思う。図書館の世界だけではなく、もはや地域全体のテーマかなという気がする。(平賀委員)
- 「すべての県民が」とあるが、生き生きと使っている先行事例があるかどうかは重要だと思う。実証実験を始めるにしても、予め「あそこ手を組んでこうやりましょう」とか、「高校の授業で使うから資料をこうしましょう」とか、埋め込んでいくことも必要。個々平板にみんな一緒に全員でとやってしまうと、結局使われないで終わってしまうことが多い。リアルな場所で活用するデータベースにも同じことが言える。基盤としては大切なことだが成功するための良い事例をあらかじめどこかに仕込むことも大切。(平賀委員)
- ゆめサポママに関わっているお母さん方は、比較的オンラインとかズームとかをやっている方が多い。「こういうことができるよ」という発信さえしていけば、「使ってみよう」と言う人は多いのではないかなと思う。お母さんは図書館に行っても子供の本を借りてさっさと帰る。自分の本をゆっくり選ぶとかできない。なので、スキマ時間でちょっと読めるのは素敵かなと思う。こういうことがあるってということが伝われば、使う人は多いと感じた。(松山委員)
- 長野県内の一般紙でデータベース化されているのは信濃毎日新聞だけだが、ローカル紙では長野日報を諏訪の図書館が、南信州新聞を飯田市立図書館が自らデジタル化している。それは図書館側の時間・お金・人を使ってやっていること。電子書籍という本を今の予算の中で買ってくるのではなく、一緒に作り出すしくみを統合的に考えていくことが大事。使う側にとっては、紙も電子もDBも同じように見えるようになるといい。(平賀委員)

ウ 信州ナレッジスクエアについて

- 学校現場でいうと探究学習が進んできていて、電子書籍にしてもナレッジスクエアにしても活用していけるのではないかなと思う。高校では、来年度から生徒は全員、自分でタブレットを準備しなければならない。保護者の負担を考えると、かなり高価なものを購入するからには学校としても活用を場をしっかりと考えていく必要があると思う。ただ、学校の現状はかなり忙しくて、授業の中でしっかりと図書館を活用できているかということと実際そうではない。生徒たちも忙しくて、本を読む時間がない。スマホを持てば動画を見たり、ゲームをしたりしてしまう。電子媒体を活用する以前の段階のところをしっかりとしなければということを感じている。

子供たちにとって、早い時期に「本ってこんなに楽しい、おもしろい」と思う原体験が無いと、時間があっても、媒体があっても、電子書籍があっても、読んでみようということにならないのではと危惧している。小さいうちから本が身近になるようなことを進めていかないと、年々読めなくなっていく子が増えているし、読めなくなる子はさらにどんどん増えていくと思う。電子書籍やナレッジスクエアなど素晴らしいと思う反面、本を読むという入り口にさえたどり着けないのではないかという部分を何とかしないといけないと思う。

先行事例という話が出たが、県立図書館で電子書籍を導入という話をしても高校現場では知らない人ばかり。そういう人に対して「こう使えば」とか、「こんな風に使えば簡単だよ」といった先行（成功）事例が沢山上がってくると、現場の忙しい中でもちょっとやってみようかなとなる。現場に届いてほしいことはあるが、肝心なところが届いて来ない。

県立図書館で取り組んでいることは、私も委員になるまで知らなかった。素晴らしいミッションだが、「掲げています」だけでなく、届くべき所へしっかり届けていかなければならないと、委員をさせていただいている自分自身の反省を込めて感じている。（内山委員）

- ・ 読書とは何なのか。1冊の本をきちんと読むのが読書という基本的なイメージがあるが、変わってきたのだと思う。子供たち高校生がタブレットを持って調べようとしても、ただググるだけってどうなのか。ググって出てきた情報は自分たちが学んでいく上でどうなのか。それに対して作ったのが、ある種不便ではあるが「信州ナレッジスクエア」という情報への入口であり、ポータルとしての意味付けだと思う。県立図書館にこういう情報基盤があると知ったり、これから進む大学の人たちが書いている論文を読むために、J-STAGEへ行けば読めることをまず知ったりすることが大事。そこで、ググると同じように信州ナレッジスクエアやJ-STAGEで出てきたものをちらっと読む。これもこれからの読書として大事なこと。まずは、情報の入口に何があるのかを伝え、ただ豊かに本を読むということだけではない情報への接し方を県立図書館が高校や中学や現場の方に向けて広められるかが重要。戦後70数年、読書推進活動ということを図書館界や出版界は熱心にやってきたが、それとはまた違うアプローチのしかた、皆がテキストに触れること、意味を理解することの活動をどのような形でやりたいと思うか、打ち出せるかということが大事。学びの場での探究的学習として、勉強や教育じゃなくて、「こういうものが見たい」ということを図書館と学校で一緒になって考えられたらいいし、全県的な学校のスタンダードとして、県教育委員会でも「こういう学びってあるよね」と広げていけるようになったら素晴らしい。是非そんなことを一緒に考えていきたい。（平賀委員）
- ・ 電子書籍と紙の本を読むことの可能性において、探究学習にこそ教育委員会が目をつけるべきところがあると思うので、そこを上手に先行事例に持ってってもらいたい。紙の本で入り込んで読書をするのと、探究学習において電子書籍で楽しみながら学ぶということの違いや可能性が出てくることを楽しみにしている。（大林委員）
- ・ そこは実は根本的に大事なこと。探究的な学びは今までも本でやってきたが、デジタルデバイスにより自分で探す、表現する、編集するという力が、今までより格段に拡張されている。でも、十分に享受されていない。享受して作り出すことで、今まで「読書しようと言われ続けたけれど進まなかった」ということを乗り越えられるんじゃないか。技術がもたらしてくれたすごい大きな転換だと思う。アーカイブも同じ。今までは大学の先生や研究者が作ったものを記録して、我々はそれを読んで理解していくことしかなかった。でも、今は自分たちが作り出せるんだということを知って、その先頭を県立図書館が仕組み、皆さんが取り組んで走っていくということだと思う。そこを大事にしてほしい。
図書館にとって、蓄積すること、保存することは大事だけれど、何よりもまず自ら作り出し、いこうとするムーブメントが社会のものになることが目的なんだということだけは大事にしてほしいと思う。（平賀委員）
- ・ 駒ヶ根市では基本的に小中の調べる学習をしているが、大人のアウトプットの場がないので、大人の部として大人の調べる学習を図書館でやってみた。その結果10年間研究を続けてき

た方が、文部科学大臣賞を取ってアウトプットの最終的な段階としての記念講演まで行った。それを見て、自分も何かやってみたいと言う人はいる。アウトプットできる場が図書館という場の中で生まれてくることも大事だと思った。

今、公民館の立場では、手弁当で地域の人が集まって区史を作ろうとしている。地域の歴史のふるさと学習を積み重ねている様子を見ていると、素朴な形だが地域の中でも、「ナレッジスクエア」が生まれてきていると感じる。こういう時代だから、最終的にはEブックにしようとか、クラウドでウェブ公開しようという話も出ている。同じように取り組んでいる地域もあると思う。長野県内には、そういうのが好きな人はいる。来年、明治5年の学制発布から150周年になる機会に、学校誌をいろんな学校で作っている。そういうものも最終的にはネット上にアップしたり、地域で作られた本をアップしたりしても面白いと思う。

(春日委員)

- ・ ママサポの記録をあげていくとか、残していくとか、ウェブを使って歴史を積み重ねていくといい。検索するとママサポが出てくるとか、そんなコラボレーションができればいい。ウェブの幅を広げていくことも大切だと思う。思いもしないことがいろいろ出てくるのもいい。図書館はつい分類したくなるけど、一般人の発想としては、とりあえず見られるようにどんどんやってみてほしい。(平賀委員)
- ・ ナレッジスクエアを楽しみにしている。たとえば図書館で今からデジタルアーカイブの本を持つのはとてもお金がかかってしまう。ナレッジスクエアを活用して、自分たちの写真を上げたり地図データをあげたりできたらいいなと考えている。そういう使い方ができたら嬉しい。(大林委員)

6 その他

- ・ 会議終了後、「信州・学び創造ラボ」で委員と職員との懇談を行った。